

日本現代文學全集 83

佐多 稻子
壺井 榮 集

講談社

日本現代文學全集

83

佐多稻子・壺井 榮集

編 集

伊 藤 整
壺井勝一郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉

初版 第1刷

昭和39年5月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著 者 佐 多 稻 子
壺 井 榮

裝 幀 蟹 江 征 治

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株式會社 講 談 社

印 刷 大日本印刷株式會社
製 本 株式會社若林製本工場

東京都文京區音羽 2-12-21

郵 便 番 號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振 替 東 京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106836-2253 (2)

(文1)

佐多稻子集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

齒 車……………五

くれない……………一四七

キャラメル工場から……………二〇六

牡丹のある家……………二二

泡沫の記録……………二二三

夜の記憶……………三九

女の宿……………三八

作品解説……………平野 謙 四一

佐多稻子入門……………小田切秀雄 四七

年 譜……………四三五

参考文献……………四四五

壺井榮集目次

卷頭寫眞

筆蹟

風……………二四九

裊襠……………三五

大根の葉……………六七

石垣……………四〇五

作品解説……………平野謙 四二

壺井榮入門……………小田切秀雄 四三

年譜……………四六

参考文献……………四六

佐多稻子集

旅情

佐多 稲子

故郷へきて、旅の心地になるが、
故郷へ遠く行ってゐることだ。それには、
はげしく五島まで行ってゐる。

齒 車

捨 て 鐘

帝大病院の施療分娩室には、向い側に二臺、こちら側に三臺のベッドが、足を向い合せにおかれていた。明子は今、三臺のまん中のベッドに仕度をして横になると、もうまかせ切つた安心が甘く彼女をとらえ、迫ってくる緊張を抱き込むようにして診察を受けた。夜の九時過ぎだつたから、外の廊下とそれにつづく病室のあたりはひっそりして、分娩室の中だけ白っぽい灯りに照らされていた。明子のほかに二人の産婦がいて、そのひとりが出産がすんだのもあろうか、明子となりに眠つたように静かだつたが、明子の足の先きに見えている向いのベッドにいるひとりは、陣痛のうめきを上げていた。助産婦や看護婦や五六人がベッドの周囲にも慣れた静かさで動き、それが明るい光の中で、この部屋だけに繼續された活氣を浮び上らせている。

明子のところでも、看護婦のひとりが明子の腹部に聴診器を押つけて、その上にかがみこむようにして耳を當て、胎兒の心音を聴きはじめた。聴診器は明子の腹部の皮膚に強く當つて痛い。

「お痛みになりますか？」

もの柔かだが抑揚のない事務的な聲を下の方に聞いて、明子は、ええ、と答え、天井に目を見開いている。

ベッドへ上るとき、看護婦の手で解かれた腹帯は、輪に結んで枕

の上の棧に通してある。明子の兩腕はその腹帯の端しにすがつて力をそこに支えていた。明子の陣痛はまだ間をおいていたが、陣痛のたびに彼女にはもう、やがてそこに聲を上げる赤兒への感情が、あるおもいでこみ上げてきていた。それはこれから、その赤兒と共同でひとつのことを爲し遂げるのだ、というひそやかで力づよい提揚の實感であつた。

彼女は今ここにひとりだつたが、ひとりであるということが赤兒へのそういう共同のおもいを強めてもいた。十條のわが家では、數え年三歳の長男が、手傳いの少女の辰子と二人だけで、もう眠つたであらう。そして夫の廣介は、明子が今夜ひとりの出生を爲すことを知らずに、王子警察の留置場の板の上にいるはずだつた。

向い側のベッドの周囲では、やがて出産の準備にもものしくなつた。醫師や助産婦や看護婦に取りかこまれ、産婦は高くうめいた。助産婦のそれを整え、勵ます聲。

「はいッ。もうちよつとですよ！」

産婦の力む聲が泣いてふるえる。明子の枕の上からその出産の場が見えていた。産婦の年齢はわからない。が、その泣いてふるえる陣痛の聲は精根こめて可憐であつた。

明子の胸に、女というもののいとしきがこみ上げてきて、彼女は自分も泣き出し、それを手で蔽うすすり上げた。自分も今、その場にいるために、同感のすすり泣きは優しく彼女の心をひたしていた。

助産婦たちのせわしい言葉につれて、裂くような嬰兒の産ぶ聲があり、それは部屋の中に満ちた。

あつ、今、こうして一人の誕生があつたのだ！

純粹にそれだけの感動が明子の胸にふるえ、そのおもしろうちに彼女自身の陣痛がわき上つてくる。

ああ、もうすぐ！

そこに豫想される期待で、彼女は枕の上の帯に両手ですがり、苦

痛に堪えて息を張った。

夜更けて彼女は女兒を分娩した。最後の一息にどろりと重たい流れを感じたとおもうと、そのあとに明子はわが子の泣き聲を聞いた。

それは自分が生んだ、というよりは、赤兒自身の懸命さで生まれ出たようにおもわれ、明子はその愛らしさに涙ぐんだ。

「女のお子さんですよ」

助産婦のそういううちにも、赤兒は明子のももの間で泣きつづけ、ひたひたと小さい足の平で母の太ももを蹴った。小さな、小さな、柔かい感觸。それははじめて外界で母と子の間に行われた接觸であつた。はつと明子はその感觸におもいを据え、ほほ笑んだ。

私の太ももを、子どもの足が蹴っている。この瞬間のつながり、と明子はそのこにまだ自分と赤兒との肉體が結ばれたままであるのを感じ、共同の事業を爲し遂げたわが子へのおもいに、彼女は胸の中でそれを語りかけていた。

赤兒は助産婦の手で別室に連れ去られ、明子はそのあとに男の醫師の手當を受けていた。明子は出産のたび毎に異常出血のくせがあつて、今も出血がとまらないのであつた。太い注射針が太もものにさされ、高く持ち上げられたガラス罐から多量の液がおくり込まれていた。その長い時間を堪えていることは疲労した身體に苦痛であつたが、明子はそれでももう、小さなものをおくり出した安心で、自分自身の危険には氣づかないのであつた。

ようやく手當が終つたとき、醫師は彼女の顔をのぞいて、おこつたように言つた。

「もう、あなたは、子どもを生んじや駄目ですよ。今だつて、もう少しで致死量に近い出血ですよ。出産が重なる毎に子宮の收縮が利かなくなりますからね。今度お産をしたら、あなた死んでしまひますよ」

「ああ、そうですか」

疲労した頭が鈍くしか反應を示さない。明子は微笑して醫師を見上げていた。彼女には今は、さつきからの醫師や看護婦の眞剣な手當の不安も、傳わつてはいなかつた。赤兒が彼女の太ももを小さい足で蹴り上げているとき、多量の出血が自分の體內から排出されていたこわさに彼女の氣づいたのは、もつとあとだつた。

彼女は赤兒の顔を見たい、とおもつた。赤兒は別室に連れ去られたままだつた。二年前に、やはりここで長男を生んだとき、湯で洗い、産衣をきせられた嬰兒は、看護婦に抱かれて、母の前に顔を見せに連れてこられたのだ。

その手順が今夜はふまれていない。明子はあの、太ももを蹴つた女兒の顔を見たいとおもつた。遠慮がちな明子はそのを押えたまま、うとうとと夜を明かした。

明子の疲労した頭腦は、まだ赤兒を見ないということ、そわそわと不安にとらわれはじめた。わが子がどこかにまぎれてでもいるような不安は、疲れた神經のせいだつた。朝になつて明子はたまりかねて言ひ出した。

「私はまだ、赤ん坊を見ていないんですけど」

「おや、そうでしたか」

若い看護婦はのどかに答えて別室に引返して行き、そして赤兒を抱いて明子のベッドにもどつてきた。

「はい、御對面。坊ちゃんですよ」

明子は、そのとたんに、さつと顔に血ののぼるのをはつきりと感じた。

「あの、私は、女の子を生んだはずなんですけど」

「あら、そうですか」

と、また看護婦は同じ言葉に至極平靜に言つて、ゆつくり引返して行つた。明子の胸はあわただしくかき亂されている。私の生んだ赤ん坊は、どこにまぎれているのだろう。同じ日に、時刻もあまり違わず生まれて、ひとつ部屋におかれてる嬰兒は見分けがつかない

くなるのではなからうか。

このベッドの上で生まれ出てきて、明子の太ももを蹴つたときでさえまだ、たしかに自分の肉體とつながっていたわが子が、今はそのつながりの証明を失つてしまつたような不安におそわれていた。が、それは赤ん坊が間ちがわれたのではなくて、母親の方を間ちがわれたのにちがいない。まもなく抱かれてきた嬰兒は、明子の用意したピンク色のガーゼの産着をきていた。

「柿村さんですね」

看護婦は明子の姓名をたしかめて、抱いている赤兒の顔を明子の上に見せるようにした。

「ああ」

明子はひとり言につぶやき、素早く赤兒の顔を點検するように見つめた。目鼻立ちのちんまりした赤兒は、数時間前に生まれてきてもうそこに、ちゃんと眠つていた。

「どうもありがとうございます」

看護婦に禮を言いながら明子は、心の中で、まあ、口が小さいかわいらしいわ、とつぶやき、赤兒の顔をしらべた安心にはほほ笑みを浮かべていた。似ている、とも見えぬながら、それはたしかに明子の生んだ女兒にちがひなかつた。もうその顔は忘れない、と彼女は連れ去られる嬰兒の顔を心に追つていた。

長男をここで生んで、最初にその顔を見たとき、長男の顔は鼻も口も大きくて、顔全體の中から道具立てがはみ出しそうに見えたのにくらべて、今度の女兒は、鼻も小さく口も小さかつた。まあとにかく口が小さいから、と、女の兒の顔立ちにそれが尋常におもえて、明子はようやく落ちついていった。

無事にすんだ、という安心さえ自覺されてはいなかった。ただ彼女は事態が一步前進した、というような感じがしていた。出産をま近かにむかえて、彼女の周囲はこの二十日間のうちにあわただしい變化をかぶつていた。夫の廣介が外出したまま歸らなくなつたのは

二十日前だつた。明子自身も加わつてゐる文化團體の主要な働き手たちが一齊に檢舉され、廣介も會合へゆく途中から連れさられていた。檢舉をのがれた數人は、身體を隠したという、それは彼らの運動の大きな變化だつた。明子自身、あらゆる事態の豫想に身構えねばならなかつた。このとき出産を控えていたのだ。今それは無事にすんだ。が、そのあわただしい條件の中だから、無事にすんだと安心するよりは、赤兒をおくり出し、自分が身輕になつたことに事態は一步前進した、と感じた。

この病院の中では、明子はひとりの産婦にすぎない。異常出血を止める處置の注射のあとがいつまでも左ももで痛んだ。晝近くなつて、無力な産婦である明子は、看護婦に抱きかかえられて、廣い産室のベッドに運ばれていつた。

産室はひとつの部屋がはるかに見渡せるほど廣かつた。長方形のその室の兩側に、ずらりとベッドが並んでおかれていた。明子の移し變えられたベッドはそのまん中へんの壁ぎわにあつて、左となり右側には若い母親が赤兒と枕を並べていた。右側のベッドには中年の女がいて、何故か彼女のそばには赤兒がいなかつた。あとで分つたことで、右となりの中年の女は、異常につよつたりのために、母體があやうくなつて入院しているのだつた。彼女だけがこの室では異例だつた。ずらりとどこまでもつづくように見え見えるすべてのベッドで、みんなそのひとつひとつには、一人の女が一人の赤兒を抱いて寝ている。明子のところからそれがみんな眺められるわけではないが、その想像をすると、それは壯觀にちがひないとおもわれた。明子はこの、施療で入院している。廣介の高等學校時代の友人がこの帝大病院に働いていて、その世話で施療の計らいがされていた。その廣い産室のベッドの産婦がみんな施療であるのかどうかはわからない。が、施療産婦の入院したこの部屋は有料だとしても最下等であるにちがひなかつた。けれどもベッドこそずらりと並んでいるが、部屋に暗いかげはなく、清潔であつた。産婦と嬰兒が、

そこにいるからにちがいない。

外には満洲事變から上海事變につづく空氣が重く垂れ込めていた。しかし、ここではたぐさんの赤ん坊が生まれて、すべてのベッドで一人ずつの母親がわが子を抱いて乳をふくませているのだ。その對比が明子の胸に一層この雰圍氣を感動的にしていた。ここでは生活の色合いの相違さえ、産婦と嬰兒という共通の本然の姿にかき消されて、ただ乳の匂いと消毒藥のにおいがするだけ。明子も今はそこに腰を据えている。

やがて明子のベッドにも、ピンク色のガーゼの産衣をきた女兒が、看護婦の手で差し入れられていった。

「お前か」

明子はベッドの上だけに限られた母子の世界で、赤ん坊の頭を眺めた。ベッドの上だけ、そこでは、單純に、自分と赤兒だけがあつた。いつまでもそのままでいたいほど、そこには安らかななごみがあつた。

室の中は、廊下をへだてた外の、春の陽光をのぞんで明るかつた。昨日女兒の生まれたのが四月十日。帝大病院の構内には、櫻も咲いているかもしれない。

あちこちへ見舞い人が訪れはじめている。そして明子のところにも、手傳いの少女の辰子が赤い頬をして、長男の行一を連れて近づいて來た。數え年三歳の行一は毛絲の服をきて、慣れぬあたりの空氣の中で母親だけを目當てだというようにまつすぐに明子のベッドのそばに來ると、そこにすでに知らぬ赤兒が寝かされているのを見て、不當に何かが犯されたような氣持の表情をした。かねて神經太く、泣きも笑いもあまりしない男の子だが、その時彼は、

「僕が寝るウ」

と、主張するようにいい、赤兒を押しどけるようにして、ベッドの端しに片足をかけてよじのぼろうとした。

「赤ちゃんよ、行一。うちの赤ちゃんよ」

行一をなだめながら、明子は辰子にむかつて言っていた。

「新聞、持つて來た？」

それは昨日うちを出る時から、頼んでおいたことだつた。

行一は明子になだめられるとすぐ、母のそばを自分ではない小さいものが占めていることにあきらめた。が、わざと赤ん坊は見ないというようにそのへんをちろちろと歩きまわつた。

明子は辰子から受け取つた新聞を枕の下に差し入れながら、頭はもう辰子に向けて頼みこむような視線でいつていた。

「ねえ、辰ちゃん悪いけど、あんた、柿村さんのところへ知らせに行つて」

廣介の姓をいうのが習慣になつていて、柿村さんといい、その頼み込む調子も語尾をやわらかく上へはねた。赤ん坊をのぞいていた辰子は明子を見て、持ち前の鼻にかかつた高い聲で答えた。

「はい。行つて來ます」

柿村のところといえは警察である。辰子の即座の返事は氣丈だつた。十七歳のこの少女は日ごろから役に立つ娘だつた。

「悪いねえ、行一を連れて行きなさい。それに赤ん坊が生まれたんだから大丈夫だよ。すぐ逢わせてくれるよ。道順はおしえて上げるからね。歸りに寄つて行つてちょうだい」

「ええ、わかるとおもいますわ。大丈夫です。赤ちゃんの生まれたこと私、話して來ます」

辰子は赤い頬をして、小鼻をいからせた。彼女も氣負っているのにちがひなかつた。このごろからの柿村の逮捕と、昨夜の明子の出産、小さい行一の世話などが今は辰子ひとりにかかつていた。その異常な狀態に否應なしに巻き込まれて彼女も身がまえている。

明子は辰子の顔を目と呼んで小聲になり、柿村のいる王子警察への道順をおしえた。

「そしてねえ、赤ん坊の名前を考えておいて下さいっていつて來

て。それからもうひとつ」

と明子はいいい、この構内の神経科に入院している實父のところへも知らせを頼んだ。丁度数日前から、實父は毒に犯された脳神経の治療のためにここに入院しているのであった。

「そいじゃねえ、私のところはいいいから、もう行つてちょうだい。頼んだわね」

「はい、それじゃ行きます。行ちやん、もう歸りますよ」

昨夜から行一も辰子と二人きりなのだ。行一もそれを承知しているように、もう母にはまつわりつかずに、すぐ辰子に手を引かれて部屋を出た。明子は枕越しに小さいうしろ姿を見送つて、涙つぽくなりそんな氣持を押えた。

どこかのベッドで赤ん坊が泣き出した。すると誘われたように、あちこちで同じように泣き出し、この廣い部屋の中が赤ん坊の泣き聲でいっぱいになった。

明子は自分のそばでも泣き出した女の子を抱き上げて乳をふくませた。

「お乳は出ますか？」

通りかかつた看護婦が明子の胸元をのぞいていつた。

「あんまり出ないようなのですけど」

明子は看護婦の顔を問いかけるように見上げた。今度明子の乳はちよつとも張つてこない。明子は先程からそれが不安になつていた。

が、看護婦は聞きながす調子で答えた。

「今に出て来ますからね。出なくてものませていらつしやいね」

「はう」

答えながら乳首を吸つている赤兒をのぞいた。赤兒はじれたように乳首をはなして泣き出した。

私の乳は出ない！ 明子のはがく然としたようにそうおもつた。それは豫想しないことだつた。このあいだからの心配で、私の乳は出

ないのであろうか。明子はおもいがけぬ打撃に、暗い目をした。ミルクを買わねばならぬようなことにでもなれば、今の彼女にそれは経済的に大變な負擔であつた。それにこのごろの人工栄養は赤兒の發育にも十分でなかつたのだ。

幾度乳首をふくませても、赤兒はやがて悲しげな聲で泣き出す。

ああ、乳が出ない。そうそくと明子自身が泣きたくなつていた。肉體への何とあからさまな影響だろう。彼女は唇をかむようにして泣きやまぬ赤兒をゆすり上げ、通りかかつた看護婦にミルクを頼んだ。

「くせになつて、お母さんの乳をのまなくなるんですよ」

看護婦がそういいながら持つてきたミルクを、赤ん坊は吸つて、ようやく眠つた。

私は打撃を受けている。乳房をもみながら、この場での母と子だけのなごみの中で、自分につながる外を感じた。そして彼女は看護婦の目をぬすむようにして、枕の下においた新聞を取り出した。新聞の社會欄は、このごろ連日、プロレタリア文化連盟關係の檢舉の記事を大きく扱つていた。明子の今ひろげた新聞にも、明子の知つた顔の寫眞が上から下へ六七人も並んで載つていた。その寫眞の顔は明子の所屬する作家團體の仲間ではなかつたが、それだけ檢舉が廣いことを語つていた。明子がいづも一緒に仕事をしていた瀧井岸子も短い旅行先からわが家へ歸つたところを、留守中に張り込んでいた警察のものに檢舉されている。岸子の夫の瀧井廉三は檢舉の手を逃れた。この二十日ほどの間、明子の周圍はどれも一樣にあわただしかつた。檢舉されたものの妻たちは、彼女たちもそれぞれの分け持つた任務に一層忙しくなりながら、夫の檢舉への抗議と世話にかけまわつてゐる。そのあわただしい雰圍氣は、ベッドの上でひそかに新聞をよむ明子にひしひしと傳わるようであつた。

明子は新聞を枕の下にもどすと、仰向けに目をすえた。つい二カ月前、瀧井廉三と岸子の新居へ、明子は岸子について行つて立ち寄

つたことがある。ひとつそりと住宅のむかい合つた古めかしい路地の奥だつた。岸子は玄關の戸を開けると、

「ただいま」

と聲をかけた。その聲はまるで少女のように澄んで甘くひびいた。奥で返事をする廉三の聲と共に、明子はそれを心にしみて聞いた。今そのことをおもひ出す。みんなが今日の變化を豫期していなかつたとはいえない。が、明子たちの氣持には、抗議の感情でその豫期は心の外におかれていたといえよう。

「よう生れたつてね」

次の日明子は、全くおもひがけぬ西川の聲を聞いて、はつと顔を上げた。背の高い身體をぶつきらばうにもあつかうといつた調子の西川は、てれたような優しさで笑ひ、

「女の子だつて？」

「ここ、どうしてわかつたの」

「ゆんべ、よそで聞いたんだ」

「そうお、どうもありがとう。だけど大丈夫なの」

「おれかい？」

そう言つたまま彼は黙つた。

世帯づ氣のみじんもない西川の姿は、この産室の中で、明子には不似合に見えた。それだけにここは危険ではないのかもしれない。明子は遠い旅先で親身なものに突然めぐり合つたように、彼の出現にいっきした視線を向けた。

「どうしたい。金、ないだろう」

「無い。ここは治療だけど、分娩料だけは拂うもんだから、その分と車賃だけは別にしておいたの。それを拂つたもんだから」

「そんなことじゃないかとおもつたんだ。これ一枚、おいとくよ」
用意してきたように、一枚だけ折りたたんだ十圓札を胸のポケットから出して彼女のそばにおいた。

「こんなにいいの」

「ま、ゆつくり、あと大事にするんだな」

西川は明子に十圓札を渡すことが目的だつたようにそれをすますと、あつさりといつた。

「じや歸るからね」

「氣をつけてちようだい」

その言葉をひそかに、強い調子で明子は言い、太股に、しかしうつむきがちに出てゆく西川のうしろ姿を見送つた。

廣介の文學仲間であつた西川を、明子は廣介と知り合うとき同時に知つた。それで幼なじみのように遠慮もないのだが、今彼の置いていつた十圓札は明子にとつて貴重な大金であつた。しかも西川自身は、あやうく檢舉の網を逃れてゐる數人の中のひとりにちがひなかつた。その彼がひよいとここにあらわれたのである。明子は胸がひらけてゆき、ようし、とおもつた。

昨日の夜なかも、赤兒は泣きやまなかつた。乳が足りずに赤ん坊が泣くのは、こちらもおろおろとせき立てられるような悲哀をそそるものだつた。明子は背中にはげしい疲れを感じながらなおも乳房をふくませつづけた。夜勤の看護婦の話し聲が、あたりの寢しずまつた中で、ぼそぼそと聞こえていた。

「除夜の鐘つて、はじめの一つは数えないんだつてね。はじめのひとつは捨て鐘つて、いうんだつてね」

上野の鐘の音でも聞こえていたのだらうか。除夜の鐘の話などしている。意味のないその話がふと耳にはいると、明子は今の自分とその話になんとなく遠い距離を感じた。

ようし、と今はおもふ。辨當屋の注文取りが来るのを知っている。さしみ、牛乳、パン、なんでもかまわぬ、食べてやろう。乳の出ない身體に原料をおくり込むつもりだつた。

乳が出ないなんて！ 彼女は自分の肉體の敗北に挑戦するように心の中で身がまえた。

産室の午前は活気に満ちていた。長方形の手押車を室の中に押してきた看護婦は、一人ひとりのベッドから赤ん坊を抱きとつてその車に移している。明子は自分の子がその車に寝かされるのを、肩をまわして見た。箱の中に何かを詰めるように、産ぶ漬の赤ん坊たちが頭をそろえて寝かされている。赤兒たちはこれから湯をつかわせられに連れてゆかれるところなのだ。

手押車の中でひとりが先ず泣き出す。と、それにつれて手押車いっぱい赤ん坊が聲をそろえて泣き出した。

私の乳の足りない赤ん坊もあの車の中で泣いている。明子はそのおもいでやはりほほ笑んだ。他のベッドの母親たちも同じおもしろいのだ。あちこちのベッドから産婦が顔を上げ、快よいざわめきが起つている。赤ん坊の泣き聲にはそれなりに太い聲、細い聲などがあつて、それが混り合つて泣き立てるのは、何か一種のにぎわいともいう感じなのであつた。その一齊の赤兒の泣き聲をのせたまゝ手押車は母たちのほほ笑みに見送られて廊下へすべり出てゆく。

入浴をすませた赤ん坊はまた腹を空かせて泣くだろう。明子は西川のおいていつた十圓札を頼りに、辨當屋の注文とりを待つた。となりのベッドでは若い母親が今もネルの寝巻の襟をはだけ、たつぷり盛り上つた乳房を片手で抱え、片手にコップを添えて餘つた乳をしぼり捨てていた。張り切つた乳房が、ピンク色のネルの間で大きな桃の實のようだ。しかし明子はそれを見るのをやめた。昨夜、乳を吸つては焦らだつて泣きつづける赤兒に堪まりかねて、やはり今のように乳をしぼつていたとなりの産婦におもわず頼み込んだのである。

「あの、すみませんが、そのお乳をうちの赤ん坊にのませて下さいませんかしら」

「ええ」

と、返事だけあつたけれど、明子の待ちかねるほどの期待をよそに、彼女はそのまましぼりつづけ、それがすむと明子に背を向けて

ふとんの中にはいつてしまつた。ああ、厭だつたんだ、どこの子とも知れぬ赤兒に乳房をふくませるのは厭だつたんだ、と理解しようとするけれど、自分の堪まりかねたうろつきまで情けなくて、胸の底が冷えた。

向うの方からベッドをのぞき込みながら歩いてくる若い男は注文とりにちがいない。明子はこちらで待ち受けるようにしていて、いくつかの注文をした。まず牛乳、ジャムパン、クリームパン、そして夕食にはひらめのさしみとほうれん草のひたし。若い辨當屋の男に、本郷へんの辨當屋を想像した。そこは外の街の中だつた。外の街の中は今の明子に奇妙な感じであらえられる。つながりがあるような、無いような。廣介や岸子たちが警察におり、数人の身近かな人たちがどこかにまぎれながら歩いている。さつきこを出て行つた西川さえ彼女の想像の中でもとらえようがないのだ。そしてここではとなりのベッドとも通い合うものがない。そういう感じは明子の身體が弱つているからでもあらう。

明子の實父の修造が妻のお篠に付き添われて産室にはいつてきた時、明子はクリームパンを食べていた。明子は千切つたパンを兩手に持つたまま、今、室へはいつて来る父を見た。明子の繼母のお篠のかがいしきで修造はさつぱりした羽織をきていた。今年小学校にあがつた藤子も紺のスカートをはいて、修造の片方に付き添つてゐる。修造はさつぱりした身なりにもかかわらず、もう常人の表情ではなかつた。唇をすぼめ、ほほ笑んでいるが、視線には力がなくてうろろしてゐた。この室にはいつて来るのにも、氣おくれしたようにお篠の顔をうかがい、足元を亂れさせていた。お篠はこのごろからの心痛で、目のふちが泣いたあとに残つたままになつていた。ベッドをのぞいた修造は、ほう、ほう、とただ笑つた。

「廣介さんには知らせたね」

お篠は赤ん坊をあやしながらいつた。

「辰ちゃんが行つてくれてね、よくやるわ、あの子」

「ほんとに感心な、それでお金はある？」

お篠にしてみれば修造の發病で一家の崩れるときだった。そこへ廣介の檢事が重なり、明子さえ頼りにならない。お篠の方が明子に金はあるかと聞かねばならなかった。明子の話をいろいろ聞いたあと、お篠はがま口から自分も三圓を出しておいた。

廣い室のベッドの連なつた中のひとつに寄り合つてゐる彼らは、支え合う力も氣持の他には持たないのだった。だから必死なものを心の中にためて、かえつて表面ではどちらもさりげなくさえていた。明子はお篠のくれた三圓ももらつた。藤子は赤ん坊をのぞく時も修造の手をはなさなかつた。

少女の藤子は明子の實子だった。最初の結婚生活が破れて實家へもどつたとき、明子はこの子連れできてしまつていて、お篠が育てた。ようやく藤子が小學校へ上るときになつて修造が廢人だ。お篠は今後どうしてゆこうかという不安につき落されてゐるのにちがひなかつた。

明子は、しかし今はお篠の氣持に手をかす餘裕さえ持つてゐなかつた。實父の發病にも、異常に張りつめた心情の上で客觀的になつてゐるところがある。明子たちが階級運動に身を寄せてゆくことを、かつて修造は何にもいつたことはない。むしろ娘夫婦がマルクス主義をいうようになると、いつからか修造の粗末な、グリーンンの絹を張つた本箱に、マルクス全集と、「貧乏物語」がはいつてゐた。そして彼は誇らしげな表情に、ややはにかみをまじえて、ぼそぼそというのだった。

「マルクスを読むとな、たとえば」

と目の前の湯のみ茶碗を掌にのせ、
「この茶碗ひとつでも、今まで見えんじやつたものがすつかり見えるようになる。まわりから底の方から、この茶碗ひとつにこもつてゐる何でもかんでも、ちやアんと見えてくる」

下級の月給とりに終始した修造に、どんなふうになつたと見えた

のであろう。今の明子は歸つてゆく三人のうしろ姿に、修造のいう茶碗のなんでもかんでも見るような氣がした。

赤インク

そのころ、五百木信治はうすい風呂敷づつみひとつ抱えて、水道橋から神保町の方へ歩いてゐた。あたりに目を配るのはほとんど無意識の習慣で、彼はそのことで特に肩ひじを張つてゐる氣はなかつた。まるでジャンパーのように型のくずれてしまつた背廣をきて、レインハットを頭につけてゐる。その風采もこの邊りではよく見かけるものだった。學生と本屋の町、午前十時すぎのその時間は表どりの書店もまだあまり客がなく、自轉車の往來などがようやく忙しげに見えた。

五百木信治は自分も自分の仕事に出かけてきたという氣持だけだった。彼はプロレタリア文化連盟の出版部員だった。幹部たちの一齊の檢舉のち、しかし活動は繼續されてゐた。雑誌の原稿は印刷屋にはいつてゐた。それは刷り上げ、製本して發送しなければならなかつた。その間のことは、五百木たちの仕事だった。

五百木は神保町の交又點の手前で横丁へ曲り、そのあたりに多い印刷屋や本屋の間からまた路地へはいつて、一軒の家へ身體をすべり込ませた。

「こんちわア」

と、うしろ手に素どおしのガラス戸を閉めた。

家中が黒い感じの小さい印刷屋の床に、機械の音がひびいてゐた。仕事の中の三、四人の男たちは五百木を見もしなかつた。

「あ、お早うございます」

自分も割烹着をきて植字をしているこの家のおかみさんだけが顔をのぞかせて、不敵な微笑を見せて言つた。

「昨日は錦町警察から二人來ましたよ」

「えつ、來た？」

「のぞきにきたんだわね。そこらうろろ見まわしているからね。のぞいたつて何にもありやしませんよ、つて、追いかえしましたよ」

「へえ、そりやどうもすみませんでした」

「うちだつて、持つてゆかれりや困つちやうからね」

そう言いながらも、刑事に對する、してやつた、という氣持でおかみさんは五百木にむかつては仲間うち口調になつていた。

「はい、これだけ。二階へあがつて下さい」

校正刷りを五百木に渡して、階段へあごを向け、はきはきといつた。

五百木はきしむ梯子段を登つて二階へ上つた。そこは粗末な机ひとつおいただけの三疊一間だつた。汚れたガラス窓にすぐ食つついて、表どりの大きな商店のうしろ壁が見えていた。

五百木は机に向つて、今受けとつた校正刷りをひろげ、原稿を引合せて赤インクのペンを持つた。その原稿の筆者たちは、たいてい檢舉されてゐた。今も聞いたように、この印刷屋にも刑事がまわつて來たということだが、五百木にはやはり、非合法の仕事をしているという實感はなかつた。昨年の秋に結成された文化連盟が神田小川町のビルの一室に事務所を持つた。そのときからここで働くようになった五百木は、まもなく錦町警察に檢舉されて出て來た経験もあるが、それでも文化連盟の仕事は非合法だとはおもわなかつた。ただその仕事だけ、やり終わせねばならなかつた。階下のこのおかみさんの不敵さも、その意味で五百木には嬉しかつた。日本帝國主義の野望、侵略戦争反對、そんな文字を赤インクで追いながら、五百木は仕事をつづけた。

五百木の赤インクで訂正してゆく校正刷りは、滿洲國建國宣言のギマンをあばく聲明であつた。日本軍閥の武力行爲の上で滿洲國建國宣言が行われたのは、前月、三月一日だつた。その間に支配層の間には利害の對立もあり、右翼團體のテロが横行していた。井上準

之助、團琢磨などの財閥代表が血盟團員に射殺されたのはこの前後である。

五百木の目は文字を追つている。もちろん、彼はこの聲明の載る雑誌をつくることに彼の生活をおいていた。この雑誌をつくつて讀者の手に送り込むことが彼の仕事だとおもつていた。そして彼は自分の仕事にとくに非合法の感じを持つてゐるわけではなかつた。そのころ、文化連盟の活動を非合法とはおもわない、という意識は、その仕事をする多くのものの、心の中で押し返している抵抗感でもあつた。プロレタリア文化連盟は政府に届け出て組織された合法團體である。事實それまでに存在したプロレタリア文化運動の各團體が組織替えのち結合してその連盟が結成されていた。が政府はその許可をしないことで、合法とは認めまいとしていた。その關係の事情は、滿洲國建國を策略遂行中の帝國主義日本の現實の中で、對峙する鬭争の、微妙な様相なのであつた。文化連盟を非合法にしてはならぬ、ということがいわば必死の姿勢で支えている前線の方針であつた。それに對し、この三月二十日に、政府は文化連盟の幹部を逮捕する彈壓に出ていた。が、文化連盟は合法團體である。

五百木にはこの間の文化連盟を非合法だとおもわないう事情が自然にすなりとはいつていた。それは彼の經歷や性格からもとくにすなりとはいつてゐる、という傾向があつた。高等小學校を出て、貯金局に勤務しているときに、同じ課に、柿村廣介がいた。明子と結婚する前後の廣介は、文學志望の青年だつたが、五百木はその廣介からはじめは文學的な雰圍氣を、そして廣介の思想の成長につれてその影響を受けた。が、貯金局の従業員としての五百木は勤勉で、模範従業員だつた。當時の遞信大臣久原房之助の賞状を受けたりしていた。しかし彼の所持品の中の「戦旗」などが、いつか次第に目をつけられるようになっていた。

それは五百木が同僚の何人かとキャンプに行こうということまで、

局内の食堂で氷水をのみなからその相談をしている時だつた。

「おつ、これがいいや。このスプーンを持ってゆこうよ」

彼はそういつて氷水をすくつてゐる匙を目の前に上げた。

五百木たちにしてみれば、局内の食堂のスプーンの本は、自分たち従業員のものを感じだつた。五百木は軽く笑つてそれをポケットに入れて立ち上つた。

「おい、君」

と、語氣荒くうしろから肩を押えられた。五百木はその瞬間まだ、何の氣なしに振りむいた。

「君、今かくしに入れたのは何だね。食堂の匙だろう」

その男はよその課、監査課の課長だつた。監査課長は、自分の言動で顔色を青くしていた。五百木はむしろ監査課長のその表情に奇妙な氣がした。

「ええ、そうです」

五百木はそう言つて、ポケットから、今入れた氷水の粗末な一本の匙を出した。

五百木はそのときのことを、今でもたまにおもひ出す。生來口數の多くない方だから人に話したりすることはほとんどないけれど、何かの折にひよいとおもひ出すと、五百木は心の中でつぶやく。

——ひでえもんだ。その場で退職届を書かせやがつた——

監査課長は五百木がポケットから匙を出す、その食堂のイスに五百木を腰かけさせ、まるで重罪犯人でも監視しているように、真向いから見つめた。いかにも監査課長にしてみれば、匙をポケットに入れた、ということではなかつたのであろう。

「とにかく即刻、退職してもらおう。あとで返すということは言い譯にならんよ。匙一本であれ、半紙一枚であれ、わたくしするとうことは、これは盗みだからな。その現場を私に發見されたんだ。言い譯は立つまい」

おい、誰か、と上ずつた聲で、遠巻にしているものを見まわし、

「半紙とすずりを持つてきてくれ」

五百木は、くそつとおもつた。だから、紙と墨が来ると、その場で退職届を書いた。食堂の卓の上で、監視されて退職届を書きながら、相手の監査課長は摘發した興奮で表情をゆがめていたが、五百木の方はむしろ、面當ての感情だつたが、さすがに筆の手はふるえた。

和歌山の郷里から單身上京して勤めていた五百木は、次男で郷里の家に責任はなかつたが、自分ひとりは何とかして自分で食つてゆかねばならなかつた。日ごろの仕事ぶりで彼に目をかけていた係長は、そんなことで退職になつた五百木に同情し、次の職場を紹介してくれた。それは中央郵便局だつた。現業で今度は午前二時までの労働があつた。信越關係の郵便物を長野、岡谷、諏訪などというふうに區分して束ね、發送するまでのその労働の中で、五百木は次第に意識的に動きはじめた。

全日本通信労働組合中央郵便局分會。しかし組合の活動さえ、公然としたものではなかつた。他の分會との連絡もなかつた。自分の周囲で誰かを見つけて仲間をふやすことが先ずはじめの活動だつたが、働きかけといわれたその活動は、自分の危険もかけるものだつた。ようやく一人二人をカクトクして手はじめに救援會に参加させたりして、ようやく「戦旗」を持ち込むまでになつたとき、その仲間のひとりが、誇らしげに「戦旗」をひけらかしたりして、ある日刑事に連れてゆかれた。彼はまもなく出て來たが、いささかはにかなだ微笑に、なれ合うようなさを見させてささやいた。

「五百木さん、みんな調べているよ。ちゃんと分つてゐるんだ。君もあぶないよ」

君もあぶないよ、というところ、人の好きでもあるけれど、みんな分つてゐるんだ、というのは、その男がしゃべつたことにちがひなかつた。

五百木さん、面會だ、とある日呼ばれたとき、五百木は、直感